

学界消息

史学研究会関係

史学研究会五月例会

五月一日(土) 午後

中岡慎太郎の「藩論について

中国思想史における辛亥革命

絶対主義と市民革命

史学研究会六月例会

六月七日(土) 午後

臨地講演 二条城、角屋、二条陣屋

(講師)

川上 實氏

国史関係

読史会一月例会 一月二五日(土)

午後一時 於京大陳列館演習室

明治前期における信用業の発展

「紙幣整理」をめぐる一

若狭国地頭について

読史会二月例会 二月一五日(土)

午後一時 於京大陳列館演習室

近世における神領に関する二・三の問題

納所小論

吉田 晶

読史会予後会 二月二一日(金) 午後五時

於 京大薬友会館バーラ

本年度卒業生一二名をはじめ小葉田・赤松

・柴田教授、岸助教授、林屋講師ほか先輩

後輩ら五〇名出席、卒業生の前途を祝して

乾杯、歓談に時を過した。

読史会(新専攻生歓迎会) 五月六日(火)

午後三時 於妙法院

本年度新専攻生は六名、うち五名出席。小

葉田・赤松・柴田教授、岸助教授、高尾・

上横手講師ほか助手大学院学生など三八名

より、それぞれ歓迎の辞を受けた。

読史会春季旅行 五月二七(火) 二八(水) 日

天理市天理教本部―天理大学図書館―参考

館―多武峰談山神社(泊)―聖林寺―文殊

院―山田寺―飛鳥寺―石舞台―橘寺―川原

寺を歴訪。一部は予定になかった石上神宮

にも訪れた。参加者は小葉田・赤松・柴田

教授・岸助教授・上横手講師ほか三〇名。

読史会春季大会 六月八日(日)

午前九時半

産業革命の展開

慶応二年大阪周辺打こわしについて

心学普及に関する一二の問題 水野恭一郎

興福寺五ヶ所十座についての一考察

品部雑戸の展開過程

継体朝の動乱と神武伝説の成立

折衷学派について

思想史の課題と方法

会終了後、文学部教官会議室において茶話

会を催した。

東洋史関係

東洋史旧制大学院研究発表会

一月例会 一月十一日(土)

午後二時

末法思想と大乘倫理

公孫弘について

二月例会 二月八日(土)

午後二時

日唐律令に見える賤民

明末清初の居士仏教

三月例会 三月八日(土)

午後二時

漢代の勸農政策

高麗末李朝初の閑良について

熱田 公

上田 正昭

直木孝次郎

衣笠 安喜

石田 一良

兼子 秀利

杉村 壮三

楽友会館

中谷 英雄

塚本 俊孝

楽友会館

西村 元佑

李 大熙

楽友会館

杉本 嘉八

吉田 晶

心学普及に関する一二の問題

水野恭一郎

酒井 一

鈴木 良

産業革命の展開

慶応二年大阪周辺打こわしについて

鈴木 良

鈴木 良

鈴木 良

四月例会 四月十二日(土) 陳列館会議室
地方市場の發展をどうみるか

漢代の黃門侍郎 笹本 重巳
狩野 直禎

五月例会 五月十七日(土) 陳列館会議室
明代の京辺の椿朋銀について

黃巢の乱の性格について(一) 谷 光隆
——特に富商層の問題—— 善峰 憲雄

六月例会 六月十四日(土) 陳列館會議室
仏教史觀と救済觀 兼子 秀利
——民衆の仏教受容の方向——

高麗朝における科挙制について 金 洪 圭

卒業生予餞会 三月一日(土) 午後二時

修士四名、学士三名の新卒業生の予餞会を
百万遍龍見院に於いてひらき、宮崎教授を
はじめ教官、先輩、学生三十二名が出席し
て卒業生の将来を祈り激励した。

東洋史談話会歓迎会

昭和三十三年度の新入生歓迎会は四月三十
日(水) 佐伯教授始め三十余名の参加を得
て、故内藤湖南博士の恭仁山荘を訪れた。
歓迎会、昼食の後、内藤戊申先生の御案内
で博士の蔵書を見学散会した。なお、本年

度の新入生は学部六名、修士二名、博士三
名である。

西洋史関係

西洋史読書会第五回春季大会 四月二九日
午前九時半より 於楽友会館

午前の部

シュメール都市神殿の土地保有者
Iu—kur—dab—ba について 山本 茂

京都大学陳列館蔵古代エジプト中王国時代
の碑について 加藤 一朗

九世紀——一世紀ヨーロッパにおける金
の問題 堀内 一徳

イギリス治安判事の成立 朴 文 国
都市フィレンツェにおける政治思想

——C・サルターティにおける人為的
都市社会秩序の意識の形成—— 谷 泰

午後の部

中世末期南ドイツにおける租税について 瀬原 義生

南北戦争直前の北部輿論 山本 幹雄

ロシアの経済恐慌(一八七三年)

国本 哲男

経済史の歴史にかんする一つの意見 合田 祐作

Staatensystem の問題 岡部 健彦

フリードリッヒ・ナウマンの政治的立場 三宅 正樹

シュトレーゼマンの対ソ政策について 野田 宣雄

人物評価についての一問題 前川貞次郎

日本西洋史学会第九回大会 五月二四・五日
早稲田大学

本年度の大会は、土地制度のみに偏つて不
評をこうむつた昨年度の大会の反省よりし
て、自由課題と共通課題(史学史、歴史理
論)の二本だてのシステムによつて二五名
の研究発表がおこなわれた。

人文地理学関係

人文地理学会第二三回例会

昭和三十二年十二月十四日 大阪市立大学
明治における町村制の地理的意義

日本・中国・チベット・インドの比較文
化地理 押野 昭生

柳生盆地概観 川喜田二郎
柳生盆地概観 帷子 二郎

人文地理学会第二四回例会

昭和三十三年二月八日 和歌山大学芸部
明治以降における大阪湾岸の漁村の変貌

地域構造と社会構造 島田 正彦
水津 一朗

近世の紀州高野寺領における所領区分 近藤 忠

人文地理学会第二五回例会

昭和三十三年四月十九日 於楽友会館

徳川時代村落の一考察 池野 茂

奈良盆地農村の社会地理学的考察 榊松 静江

インド・セイロン・パキスタン・イラン
の見学談へスライド併写 本岡 武

地理学談話会卒業生予餞会 三月一日

午後六時 於「ミュンヘン」

同日午後、地理学習室に於て、別掲の如

き本年度卒業学部六名、修士課程一名の卒

業論文発表会を行い、会後、ミュンヘンに

於て織田教授はじめ教官・先輩・学生四十

五名が出席して、卒業生の前途を祝した。

地理学談話会新入生歓迎会 五月十一日

午後二時 於「ミュンヘン」

本年度新入生ならびに本年度、地理学に
出講される農学部本岡教授、日仏学館A・
ブリュネ教授の歓迎会を行った。雨天にも
不拘、出席者は四十名をこえ、午後五時す

ぎ散会した。新入生は三回生四、大学院修
士課程三、同博士課程一。

考古学関係

兵庫県小野市焼山古墳群の調査

三月八日―六月二十日。台地上にある約
一五〇基の群集墳。開拓のためその大部分

が破壊されるので、関西学院大学武藤誠教

授、関西大学石野博信、京都大学田中琢ら

諸氏によつて、九基が調査された。一五米

前後の円墳で、箱形の木棺を直葬したと推
定され、最大四つの主体を埋葬する。遺物

には玉類、鉄器類、須恵器がある。後期群
集墳を構造の細部にいたるまで調査した例

として、その有する意義は大きい。

考古学協会第二十一回総会

四月二十八日 東京国立博物館

大田原市湯坂中期縄文式遺跡 渡辺 龍瑞

岩手県大船渡市蛸之浦貝塚 西村 正衛

横浜市称名寺貝塚 吉田 格

陸前宮戸島貝塚調査概報 加藤 孝

姫路市千代田遺跡の調査について 杉原 莊介

伊予松山市土居窪遺跡の調査 岡本 健児

高槻市天神山弥生式住居址 藤沢長治ほか

瀬戸内海の沿岸・島嶼における弥生式集

落立地の垂直的遷移現象 小野 忠熈
埼玉県五領遺跡の調査について 大塚 初重

師楽式遺跡における塩生産の立証 近藤 義郎

肥後における割竹形石棺の例について 乙益 重隆

和歌山市大谷古墳調査概報 樋口 隆康

岩手県浮島古墳調査概報 草間 俊一

昭和三十三年度川原寺第一次調査概報 浅野清ほか

考古学上より見た播磨の古山陽道 島田 清

秋田県における板碑調査の概要 奈良 修介

京都府竹野郡弥栄町ニゴレ古墳の調査
四月八日―十三日。丘陵突端頂部に、

長さ四・八米、幅二米、深さ〇・六米の墓

墳をもうけ、中に長さ約四米の割竹形木棺

をおさめた古墳である。一部は破壊されて

いたが、鉄剣、鉄鍬が発見された。また墳

頂部には舟、甲冑、家、盾などの象形埴輪、

背後の丘陵との境には直線にならぶ円筒埴

輪列があつた。弥栄町教育委員会の要請に

より、京都大学樋口隆康助教授、西谷真治

助手が調査した。

昭和三十三年京都大学卒業論文題目

国史学専攻

備前藩における近世後期の商品生産の展開について 太田 睦美

中世説話の発展に関する一考察 児玉 識

戦国末期における今川氏について 佐々木忠夫

改良主義の歴史的評価 佐々木隆爾

——三大事件建白について—— 芝原 拓自

維新政治勢力の形成 肥前藩における天保改革と軍制改革をめぐって 中島 節子

改進黨の条約改正論 丹生谷哲一

古代奴隸制の崩壊過程 元禄享保期における商人資本の動向 近江日野正野玄三家の場合—— 西川 嘉男

啓蒙主義の歴史的役割 福沢と加藤の場合—— 広田 昌希

群馬自由民権運動史論 真下 英二

日本史における変革過程の一性格 三浦 克巳

(修士課程)

明治前期における地方政治の展開 有泉 貞夫

平安前期の土地所有について 秋宗 康子
日本ファシズムと中小ブルジョアジー
——大恐慌期を中心とする一考察—— 江口 圭一

鎮西における荘園体制と在地領主 工藤 敬一

初期禪宗史における一・二の問題について 藤岡 大拙

国造制支配について 八木 充

(博士課程修了者研究発表会発表題目)
本年は新制度第一回の博士課程修了者を出したが、京都大学文学部ではその修了記念講演会を催した。国史学専攻者の発表題目は次の通り。

明治維新の政治過程 池田 敬正
日本庄園史研究序説 村井 康彦
近世封建社会の基礎構造 脇田 修

東洋史専攻

三藩の乱 斎藤 哲男

三国魏の田制の一考察 野村 安彦

明代蘇州地方の官田に関する雑考 森 正夫

(修士課程)

清代の銓選 近藤 秀樹

ダリウス一世のアフラマツダ信仰について 恵谷 俊之

清代漕運制度の崩壊過程 山口 迪子
——商人勢力の発展と関係して——
唐代の公廩本錢・食利本錢について 横山 裕男

西洋史専攻

領那政策としての都市建設 石川 明

——中部ドイツ東部に於けるフリードリッヒ、バルボロッサの都市政策を中心として—— マルチン・ルッターに於ける社会的性格について 井上 淑子

南北戦争前に於けるアメリカの黒人について 伊藤 雄文

——特に奴隸制度を中心として——

第一次世界大戦前に於けるドイツ社会民主党の働きについて 岩永 嘉介

グーッヘルンシャフト変革の基本的特質 東プロイセンを中心として 内海 佑治

ドイツ史 ドイツ十一月革命に於けるローザ・ルクセンブルグ—— 小林加奈子

——絵画と社会の関係についての一考察—— 進藤 昭

プロイセン国王、フリードリッヒ二世の農業政策 新村祐一郎

(以下三〇頁へ)

り一三〇五年の議會に不平が提出されている。(Ibid. p. 232.)

⑨ Poole, op. cit., p. 4. & pp. 53-6. 王に關係する事件、公法廷に關係する事務は全部がナイトに限られていた。ノーサンプトン州にはジョン王時代ナイトが百人足らずで不足していたと云われる。極めて面倒な義務ではあつたが、中には行政事務、權威行使の好きなナイトもあり、本来の軍事的性格を全く失つて専ら行政、司法官として振舞う者も多かつた。

又、彼らナイト階級 gentry 層が十三世紀頃より次第に行政事務に慣れて来る事は、Denholm Young, Robert Carpenter and the Provisions of Westminster に取扱われている様であるが筆者未見。此の書物の批判、C. A. F. Meekings, More about Robert Carpenter of Harelsade (E. H. R. No. 283, 1957.) より一応の結果は得られる。

⑩ Chimes, An Introduction to the Administrative History of Medieval England, 1952, Chap. VI. & Epilogue. における封建王政より絶対王政への推移過程が説明されているが、結局、王の personal government と云う中世封建王政の伝統が、次第に bureaucratic government 的あり方に変つて行くと云う基本線に基いて叙述されている。

附記 この試論は昭和三十二年度文部省科学研究費の各個研究「西欧における封建王政と村落共同体」の分担報告の一部である。(昭三三・三・二二)

(八七頁より)

メクレンブルクに於けるグーッセルシャフトの成立について

望田 幸男

一八四六―七年の社会危機と二月革命

吉田 幹夫

(修士課程)

イタリア都市フイレンツェに於ける政治思想

谷 泰

——十四世紀末―十五世紀初にかけての人為的都市社会秩序の形成——

独ソ・ベルリン条約の成立とシュトレーゼマンの政策

野田 宜雄

フリードリッヒ・ナウマンの政治思想

三宅 正樹

——権力国家と民主主義——

アメリカに於ける自由地消滅説

森田 幸夫

——ストロング、シュエラー・ターナーのそれについて——

古代ガリア史研究

森下 忠夫

シュメール都市国家に於ける社会組織についての一考察

山本 茂

地理学専攻

姫路近郊における製革業

梅宮もりよ

和歌山県の棕櫚産業

小野 菊雄

弓矢浜砂嘴の土地利用

坂本 英夫

地域の対外活動と発展方向

成田 孝三

炭田地域における都市形成

平松 弘之

茶業およびその労働力を通してみた村落社会

藤沢美由子

(修士課程)

Al-kharizmi 図の復元と比定

高橋 正

(博士課程修了者研究発表会発表題目)

焼畑農業の地理学的研究

佐々木高明